第1章

神社の消長と地域社会——会津・土津神社を事例として

松崎　憲三

はじめに

福島県猪苗代町見禰山に鎮座する土津（はにつ）神社は、会津藩藩祖・保科正之を祀る神社としてよく知られている。成城大学民俗学研究所のプロジェクト研究「人神信仰の歴史民俗学的研究」（二〇一〇～二〇一四年度）を組織した際、当初は分担テーマとしてこの土津神社を対象とするつもりであった。[1] ところが会津藩滅藩に伴う斗南藩への遷宮と、廃藩置県による帰還という事態もからみ、まとめるまでには時間がかかりそうだという判断から先送りとなり、別のテーマを選んでしまったという経緯がある。そうしたことへのうしろめたさから、改めて土津神社をとりあげることにした次第である。

さて、人を神に祀る風習は近世に至って制度化され、霊神信仰なるものが成立した。それはもっぱら吉田神道が管轄するところであり、宮田登によれば霊神信仰には生前に神として祀られるものと死後祀られるものとが存在し、後者の場合、生前遺執をもって祟る御霊を祀る場合と、祟りとは関係なく霊神として祀られる場合との二通りがあるという。また前者のように生前に祀られる事例は少なく、山崎暗齋（一六一八～八二）、保科正之（一六一一～七二）、松平定信（一七五八～一八二九）等に限られるという。[2] 吉田神道は、神道に際立って精進した者に対して霊神号を贈り霊社に祀ることを許した。吉川惟足が会津藩主・保科正之に土津霊神号を与えたことは有名で、霊神となったのは、その人性が高く、神道の学者として優れていたことによる。生き方が神道の観念的奥義に徹していたことで人→神へとなりえたのである。[3] ただし、霊神号は生前に贈られていたものの、正式に神として祀られるのは死後のことであり、山崎暗齋や松平定信と同様、生前に祀られていたものといえるかどうかは再考の余地がありそうである。保科正之が土津霊神として見禰山に祀られるに至った経緯については後述するが、先ずは土津神社関連の先行研究の整理をしておくことにしたい。

大名家の墓所・廟所の研究は相変わらず盛んであり、手許にあるものに限っても、古墳研究の第一人者・白石太一郎による「近世大名家墓所と古墳」なる論考や、近世史家・岸本覚による「長州藩藩祖廟の形式」、大名墓所研究会編『近世大名墓の成立』等の論著がある。[4] 会津松平家の墓所に関するものとしては、会津若松市教育委員会編『史蹟　会津松平家墓所』Ⅰ～Ⅶや近藤真佐雄の「大名家墓所における院内御廟」なる論考がある。[5] 院内御廟とは、会津若松の市内にある二代藩主・正経以下の歴代の墓所をさすが、前者では見禰山の正之の御廟も取り上げられ、実測図つきで報告がなされている。一方、土津神社の創建から斗南藩への遷宮、帰還に至るプロセスを丹念にトレースしたのが塩谷七重郎であり、『土津神社と斗南』、『保科正之と土津神社』、「土津神社の

変遷」等の論著をまとめている。[6] 地元の研究者だけに史資料も豊富で詳細を極めているが、あまりにも多岐にわたりすぎているため、まとまりに欠けている点は否めない。また小桧山六郎の『保科正之の生涯と土津神社』は、土津神社の歴史を概括的にまとめたものである。[7] 最後になるが、遠藤由起子の『近代開拓村と神社』には、土津神社の斗南藩への遷宮と帰還を扱った論稿と、札幌市・琴似神社における会津藩士屯田兵（とその子孫）の土津霊神への信仰に言及した論稿が収録されており。多くの示唆を与えてくれる。[8]

小稿は、これら先学の研究に導かれつつ土津神社創建に至る経緯をトレースした後、近・現代の動向（グローバル化が進む中でのナショナルレベルの動向）に留意しつつ、神社を支える人々の心意と神社の消長に伴う地域社会の対応、氏子組織の再編（ローカルレベルの動向）について分析を加えようとするものである。

一、土津神社の創建と祭祀

土津神社の主祭神は、会津藩藩祖・保科正之にほかならない（九代容保も配祀）。正之は慶長十六年（一六一一）徳川秀忠の四男として誕生、元和三年（一六一七）秀忠の密命により保科正光の養子となる。寛永八年（一六三一）正光の遺領信濃国高遠三万石を領し、同十三年（一六三六）に出羽国山形領主となり二〇万石を領した。同二十年（一六四三）には会津藩主となり、会津・耶麻・大沼・河沼郡ほか二十三万石を領し、あわせて南山（南会津地方）五万石余の幕領を預かった。慶安四年（一六五一）家光が死去し、家綱が将軍になるに及び、家光の遺言により家綱を補佐し、幕政を主導した。幕政に関与したために会津藩主時代はほとんど江戸住いに終始したが、よく家老以下を指導して会津藩の基礎を確定させた。その政治の根幹となったのは、山崎暗齋と吉川惟足について究めた神道である。彼が暗齋らと編纂した『伊洛三子伝心録』（寛文九年）、『玉山講義附録』（同十三年）『二程治教録』（同）、『会津風土記』（寛文六年）、『会津神社志』（同十二年）は五部書と呼ばれ、藩政と文教の古典となった。寛文九年（一六六九）四月隠退。同年十二月十八日江戸藩邸において死去。六二歳。生前に定めていた土津霊社の諡号（しごう）をおくられ、生前の希望に従って磐椅（いわはし）神社に隣接する境地に葬らる。死後の元禄年中（一六八八～一七〇四）三代正容の時に、葵の紋を許されて保科から松平の本姓に復した。[9]

さて、正之の埋葬と土津神社の創建については、会津藩『家政実紀』や『見禰山御鎮座日記』に詳しいが、[10] ここでは文政六年（一八二五）刊の『新編会津風土記』巻之四十九「陸奥国耶麻郡猪苗代」の条に簡潔に記されていることから、それを以下に揚げる。[11] 筆者が記した傍線の部分に留意されたい。

土津神社境内東西三百八十六間、南北五百三十間、免除地猪苗代城下ノ北ニアリ、此社ハ肥後守正之ヲ祭レリ、正之カネテ神道ヲ吉川惟足ニ学ヒ、ト部家ノ蘊奥ヲ窮ム、〔メリ〕因テ致仕ノ後土津ノ霊号ヲ惟足ニ受ケ、没後神道ノ祭儀ニ従ハンコトヲ欲ス、寛文十二年壬子五月休暇ヲ賜ハリテ会津ニ下リ、八月二十二日寿蔵ヲ定ントテ此地ニ来リ、見禰山ニ登リ湖山ノ勝景ヲ眺望シ、没後此山中ニ葬リ、此山又磐椅明神ノ社地ナルニヨリ、神祠ヲ営テ其末社タランコトヲ命シ群臣ト宴飲晷ヲ移ス、家老友松勘十郎氏興従テ爰ニ至リシカ、湖水ノ鯽魚ヲ献シ酒稍闌ニシテ正之詠歌アリ

万代トイハヒ来ニケリ会津山高天ノ原ニスミカモトメテ

此時吉川惟足モ従来リ、同ク宴ニ連リケレハ

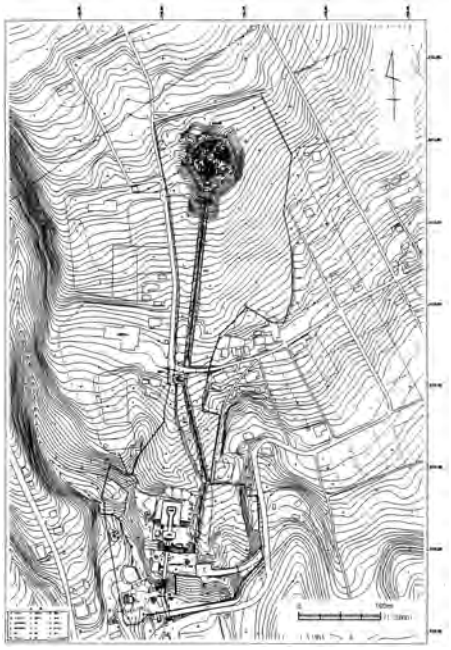
君爰ニチトセノ後ノ住所フタ葉ノ松ヤ雲ヲ凌ン又二葉小松雲ヤ凌ントモイフ

ト詠シ歓ヲ尽セシトソ、コノアタリ今ニ松樹多ク凌霄ノ勢アレハ、詠スル所ヨク協ヘリト云ヘシ、其冬十月正之江戸ニ上リ、十二月十八日ニ江戸箕田ノ邸ニ終レリ、其年尸柩ヲ会津ニ移シ、翌年延宝改元三月二十七日此山ニ葬リ、麓ヲ闢テ社ヲ営メリ、神官教員祭ヲ奉シ如在ノ敬懈ラス、其儀今ニ厳重ナリ、皆下ニ挙ク、封内緒村ニオイテ新墾田千六百石余ノ地ヲ附シ、永ク祭祀ノ料ニ充ツ

寛文十二年（一六七二）八月二十一日から二十二日にかけて家老友松勘十郎氏興、吉川惟足らを共に見禰山を訪れ、ここを寿蔵の地として磐椅神社の末社となるべく決心した。そうして十月に帰府して間もなく、十二月十八日に江戸下屋敷で薨（みまか）った。葬儀ならびに神社造営をまかされたのは、ほかならぬ家老友松勘十郎氏興であった。『家政実紀』巻之四十六　延宝三年（一六七五）八月廿三日の条に「土津様御在世中御身後之事惣而友松勘十郎ニ被仰置、大奉行被仰付候を以、御逝去之後専御遺命を奉し心力を尽し大小之御用一として不承と申儀無之、大擧御下向之儀を始、御葬送御碑石御社御普請等并御神料土田新田開発之事迄、是迄ニ段々御成就ニ相成候云々（傍線筆者）」と記されていることからも、そのことがわかる。[12]

延宝元年（一六七三）三月二十七日に葬儀が執行され、同三年八月十九日に神社が竣工した。社殿は豪華絢爛で、「みちのくの日光」と呼ばれるほどであった。また正之の廟所は墳丘上に八角の鎮石を置き、墳丘の前面には「会津中納言源君之墓」と刻んだ石を建て（写真(1)参照）、さらに廟所の南麓にある正之を祀る神社（図(1)参照）の境内には、墓誌を刻んだ大きな碑石が亀趺の上に建つ、というものである。ちなみに八月二十三日には、吉川惟足を招聘した上で御遷宮式が盛大に執り行われた。当日は藩主名代を井深茂右衛門が勤め、翌二十四日に藩主が訪れた。このように、廟と神社の創建は正之の遺志に基づき、藩政の一環として行われたものであった。こうした動きに藩領民をはじめとする庶民

写(1)　保科正之の廟所



図(1)　土津神社と廟所位置図（猪苗代町教育委員会　註(5)による）

はどう反応したのだろうか。『家政実紀』巻之四十六　八月廿五日の条に次のようにある。[13]

是ゟ先此度御社御遷宮在之由を承伝、諸方ゟ僧俗男女老弱となく往来引も不切致群集、兼而制禁をも不加候故、御仮殿ゟ御社之近辺何れも不憚出入候而致拝見候ニ付、遠方抔ゟ罷越候者ハ旅宿も塞り不得止事野宿等致、廿三日を相待居候者茂多分在之、仍而土町之末より半坂町之辺俄ニ茶屋等を構、飲食菜菓其外様々之翫物等致商売候事ニ候、廿三日ニ至り御遷宮ニ相成候ゟハ拝見之緒人雲霞之ごとく罷越候、然れ共御儀式を相妨候義も可有之哉と御遷宮之間ハ制禁を加候而御橋ゟ内江不入候故、左計之人数御橋之外ゟ御山を包ミ甚込合候ニ付、物司友松勘十

郎及差図候者如此緒人致混雑候而者其内老人子共怪我過等可在之も難計候、御遷宮之儀式終候ハヽ早速拝見相ゆるし候間必先を不争様ニと為申渡、尤立番体之者ニも彼是と厳制候義不致様申付候、依之御遷宮之儀式相済候と否参拝之緒人数群衆、翌廿四日も如此ニ候故、其日も又、殿様御参拝之内計人を制し、御下山被遊候後ハ相馳候を以、緒人御社頭之壮観ニ目を驚、毎日之参拝引も不切相つとひ候ニ付、今日御神事相済神書講談在之候後、赤飯弐石四斗を三階之大杉重江盛、濁酒七斗五升を大樽三つ江入、其外小蛸貝千五百枚片器七百枚土器を相添、満座之中江差出、吉川惟足・勘十郎を始役付之面々ハ不及申、遠近ゟ群集候参拝之老弱男女江被下候間、終日引も不切参詣御神楽をも奉奏候、致頂戴候人別大抵弐千人ニ相及候、

このように、遷宮のことを知った「僧俗男女老弱（ママ）」の輩が緒方より多勢集まり、そのため旅宿は満杯となり、神社近くの土町や半坂には臨時茶屋までできる事態となり、「緒人御社頭之壮観ニ目篤」かせたという。そうして終日神楽殿で神楽が奏され、人々には濁酒干肴等が振舞われたが、参詣人は二千人を超える盛況振りであったという。こうした記載から、庶民の関心のほどが理解される。

なお、『家政実紀』延宝三年十二月十八日の条に「見禰山御社御墳并遥拝所ニおゐて、御祥忌執行向後恒例ニ被成置」とあり、また延宝四年八月二十五日の条には「見禰山御社祭礼執行、向後恒例ニ被成置」と記されている。[14] 藩では、この両日を祭礼とするほか、藩主の江戸入り、帰還の際は土津神社に参詣することを慣例としたのである。と同時に、初代の社司に服部安休を任命し、土津神社のために社人町を造り、社司、昇殿役、宮奴（みやつこ）、楽人等神社関係者の三十数軒の集落を建設し（土町）、神社の祭りに当たらせた。さらに御料田として土田等の新田村を開拓した。その任に当たったのが、家老の友松勘十郎氏興であった。なお、この件については改めて取り上げる。

ともあれ土津神社は会津藩藩祖を祀る神社であり、祭祀主体は藩主と家臣達を中心とするものであった。では領民（庶民）の対応はどのようなものであったのか。遷宮祭における庶民の反応からおよそ察しがつくが、「貞享風俗帳」より、猪苗代川東組の状況をうかがうことにしたい。[15]

月並之事

一、正月元朝惣鎮守岩椅神社へ参詣仕。遠方は其所之鎮守を拝し相互ニ年始之礼勤七日迄遊申候

（中略）

一、同（八月＝筆者註）十八日土津様祭礼一日中遊申候　老若男女参詣仕　かたわらにニ而太鼓ならし念仏申おとりはね慰申候（傍線筆者）

一、右之御祭礼ニ付　志め縄ゑんざ在々穢無之者より指上申候　（中略）

一、廿五日（八月＝筆者註）惣鎮守岩（磐）椅明神ノ祭礼ニ而、思々ニ祝一日遊申候、老松参詣仕候

八月の土津神社の祭礼時に付、縄細工物を神社に供するほか、太鼓を打ち鳴らしながら念仏踊りをしたという。神道の奥義に徹した土津霊神に対して念仏踊りとは、と多少違和感を覚えるが、庶民ならではの土津霊神に対す心情表現と見れば、すこぶるほほえましい。

以上から、土津神社創建以降会津藩の守護神としてのみならず、磐椅神社に準じた地域の氏神として機能していた、と見ることができる。

二、斗南藩、琴似屯田兵村と土津神社

(1)　斗南藩への遷宮と帰還

前章では、土津神社創建の経違をトレースするとともに、藩と庶民双方の立場から神社の持つ意味について検討を加えた。ここでは戊辰戦争での敗北による滅藩、斗南藩の立藩さらには廃藩置県という激動の中で、土津神社がどのような事態となり、藩や藩士達がそれにどう対応したのか、この点について分析を加えることにしたい。先ず塩谷の整理にならって（表(1)参照）、幕末・近代初頭の土津神社の情勢を見ると次の通りである。[16] 慶応四年（一八六八）戊辰戦争となり、八月二十一日の母成峠の戦いに敗れた会津方は、翌二十二日には西軍の猪苗代侵入を許すことになった。猪苗代の亀ヶ城々代高橋権太夫は、亀ヶ城と土津神社を自焼するとともに御神体を社司・桜井豊記と宮奴・鵜巣猪吉らが奉持、鶴ヶ城に遷座した。しかし会津藩は籠城一ヶ月後の明治元年

表(1)　土津神社の遷宮年譜（塩谷　註(6)による）

年	月	日	歴史事項
慶応　4	8	21	母成敗戦、亀ヶ城、土津神社自焼 御神体鶴ヶ城へ
明治　元	9	22	鶴ヶ城開戦
	9	23	御神体磐椅神社にうつす
明治　3	12	11	御神体斗南へ出発
	12	27	御神体五戸着
	12	28	五戸三浦伝七方に遷宮
明治　4	2	15	御神体五戸発
	2	18	御神体田名部円通寺着
	7		廃藩
	9	16	御神体磐椅神社へ帰還遷宮
明治　7			土津神社造営着工
13	7	28	土津神社竣工　遷宮
明治　17	9	26	第９代藩主松平容保公を合祀する

（一八六八）九月二十二日に降服し開城となり、ご神体を翌二十三日磐椅神社に仮遷宮した。

明治二年の滅藩の後、明治三年に斗南藩として岩手県北部から下北半島に至る地域（青森県三戸、上北・下北の三郡と岩手県の一部）と北海道四郡（後志国瀬棚郡、同太櫓郡、同歌棄郡、胆振国山越郡）に再興が許され（図(2)参照）、これらの地へ藩主以下藩士とその家族が移住した。その数一万七千余に及ぶと言われるが、不慣れな土地での厳しく過酷な生活を強いられた。なお、明治三年十二月にこの地に土津神社の遷宮がなされたものの、廃藩置県に伴って翌明治四年（一八七一）には、一〇ヶ月を経たずに帰還遷宮という数寄な運命を辿った。ちなみに、廃藩置県によって再び滅藩すると、藩士の中には青森にとどまる者、会津の地に戻る者、新たに新天地を求めて屯田兵として北海道へ赴く者など、全国へ散って会津藩士は離散してしまったという。[17]

なお、猪苗代から斗南藩への遷宮については、ご神霊を奉持し供奉した鵜巣猪吉が記した覚書「斗南道中記」や、御供番心得・青木準之輔の「青木往晴生涯記事」に詳しい。[18] それによれば、行程一七日間をかけて十二月二十七日に斗南藩庁となった五戸に到着。翌日野月の旧盛岡藩士三浦伝七宅の土蔵二階に御社を造って遷宮した。その後明治四年二月十五日に、藩主容大が斗南藩庁となる田名部に向けて発し、十八日に藩庁の仮館となる吉祥山円通寺（曹洞宗）に到着、ご神体もここに移された。円通寺が、今日恐山を管轄する寺院として知られていることは言うまでもない。会津から斗南藩への遷宮について遠藤は、「斗南藩へ移住した藩士たちの精神的支柱となれと多大な費用をかけて遷宮し云々」と指摘しており、一方塩谷も「竟気消沈する家臣たちの士気を鼓舞するためにもと、斗南藩士の精神的支柱になれと、藩祖保科正之を祭神とした遷宮となる」と述べている。[19] しかし、果たしてそうなのだろうか。御伴番心得役を勤めた青木準之輔（往晴）の「生涯記録」には次のようにある。[20]

抑モ、神象移奉ノ事タルヤ当時若松県大参事某或日三根山ノ

図(2)　斗南藩領有地（遠藤由紀子　註(19)による）

社ニ到リ頗ル不敬ヲ加フルノミナラス旧大名殊ニ叛賊ノ祖ヲシテ神トナシ置クヘキモノニアラス速ニ除去スヘキ旨ヲ厳命シタル趣キ村役人ヨリ内通セシニヨリ遂ニ移奉スルコトトナシシナリ而モ道中ニ於ケルヤ神像及神器宝物等ハ悉ク之ヲ長持ニ納メ覆フニ葵御紋付ノ油団ヲ以テシ外見其何物タルヲ知ラシメス。然レトモ旅宿毎ニ之ヲ最上室ニ奉置シ供奉員ノ礼拝厳粛鄭重ナルヲ以テ深ク之ヲ怪ミ或ハ宰相（容保公ヲ云フ）逝去セラレ其骸ヲ藩地ニ奉送スルモノト訛伝セシモノアリト云フ。時恰モ沍寒積雪ニ際シ百五十余里ノ行程十有八日ヲ経過セリ、其二十五日盛岡県沼宮内駅ニ於テ藩地御着神ノ用意ヲ要スル為メ（事ノ急遽ニ属セシ為メ御移奉ノ通牒ナシ置クノ遑マアラサル也）余一人御先行ヲ為スコトナリ昼夜急行ヲ以テ行ク先々宿駅ニ於ケル人馬ノ用意ヲ命シ、藩ノ支庁所在地ナル五戸村ニ到リ、少参事倉沢平治右衛門氏ニ旨ヲ告ケ、旧盛岡藩ノ郷士ニシテ同村第一ノ豪農ト称セラルル三浦伝七ノ宝蔵ヲ以テ仮社殿トナシ二十七日淺水村ニ奉迎シ、日没ノ頃無事予定ノ仮社殿ニ安置シ奉ル。（傍線筆者）

傍線の部分から明らかなように、時の若松県大参事の意向を耳にして驚き急遽遷宮を決定したため、藩への連絡をとらぬまま出発した模様である。慣れぬ土地への移住という苦難の道を強いられた藩士達にとって、土津霊神がどれほど精神的支えとなりえたかは想像に難くないが、遷宮に至る事情はこの日記に示されているように、急な事態への対処としてなされたもので、その効用等を考慮して計画的になされた、というものではない。その点だけ確認しておきたい。

斗南藩への遷宮に関してはそれなりの史資料があるものの、廃藩置県後の猪苗代への帰還遷宮と明治十三年（一八八〇）の土津神社の再建に至る史資料は相対的に少ない。そうした中で、北海道大学付属図書館北方資料室所蔵の「明治五年　五番組の『日記』」を見出し、この間の動向に分析を加えたのが遠藤である。遠藤によれば、『日記』にある「旧会津見称山御再建書」は、九月五日付で会津に居住する町野主計、諏訪伊助から余市移住の会津藩士四名にあてて、土津神社再建のために出金を募った文書だという。また、『日記』にある「旧会津藩祖松平正之ノ祠建立仕度　願書」（写）については、旧会津藩領に残った者が、土津神社の再建の許可を若松県令に願い出ている証拠としている。さらに塩谷の論著を援用しつつ、旧藩領では明治五年（一八七二）から長尾源治ら六人の手により、社地復古資金が募集されるようになったが、対象範囲は旧会津藩領全域に及び「見禰山寄附帳」三巻からは、明治八年（一八七五）までに二一三八円九〇銭が集められたが、名簿には一般民衆の名しか見られず、藩士主導で再建活動が始められたものの、「土津神社は民衆の意向も反映されて再建に至ったのである」と結論づけている[21]。

近世以来藩、藩士のみならず庶民からも敬い親しまれてきた土津神社だけに、明治初頭の再建に当たっても多くの寄付金が集まった。そうして神社の社地の山林を買い戻すのみならず、明治七年（一八七四）に社殿の造営にとりかかり、明治十三年（一八八〇）には社殿も完成し、七月二十八日には磐椅神社より遷宮がなされ、まがりなりにも元のサヤに納まったのである。

(2) 琴似屯田兵村と土津神社

廃藩置県後、屯田兵村に入植した斗南藩士（旧会津藩士）達は、土津神社とどのようなかかわりを持ったのだろうか。札幌市西区に鎮座する琴似神社を対象に考えてみることにしたい。

札幌市西区琴似町は、開拓使時代最初に開設された屯田兵村が発展して形成された町である。明治八年（一八七五）三月　国防と開拓という名目のもと屯田事務局が設置され、五月には応募者が移住した。琴似兵村に入植した者の出身地は、「青森県八名（但し斗南藩士を除く）、宮城県一〇〇名、福島県五七名（斗南藩士五三名、余市「斗南藩士」三名、会津若松出身一名）、北海道出身一九名、その他三五名である。[22] これを見ると宮城県亘理（伊達藩士）系が最も多く、次いで斗南藩士系であることがわかる。ただし当初明治政府は、旧幕府軍のうち会津藩（斗南藩）士に関してだけは、屯田兵の資格を与えない方針であった。しかし、余りの応募の少なさに、旧会津藩士の入植を青森県士族という身分で入植を許可したのである。[23]

ところで琴似神社について、故菅原正前宮司は、「明治二年北海道に開拓使が設けられ、明治八年開拓使最初の屯田兵（開拓使）として琴似に入植した二〇八戸の内、有志の人々は、旧藩主臥中城主（宮城県亘理）伊達藤五郎成実の遺徳を敬慕し、武早智雄神と尊称して、山の手（山の手二条一丁目）に神祠を建立し、御神徳を北海道開拓の上に顕彰するために武早神社と号して祭祀を厚くいたされたのが、琴似神社の創始」と述べている。[24] その後明治三十年（一八九七）に琴似神社と改称し、明治四十四年（一九一一）に大国主大神を増祀し現在地に移祠。昭和四十三年（一九六八）に伊勢神宮内外宮の神々を増祀した。さらに興味深いことに、平成六年（一九九四）五月十五日には土津霊神を増祀しているのである。問題は何故この時期に増祀するに至ったかという点である。

亘理系の藩士達が伊達成実を祀ったならば、会津系の人達も保科正之こと土津霊神を祀りたいと願ったに違いない。しかし賊軍というレッテルを貼られ、無言の圧力が働いていた当時にあっては、そのことを容易に口に出せなかったものと推察される。ところが明治四十四年（一九一一）に札幌神社（現北海道神宮）の祭神大国主大神を増祀した折、ようやく旧会津藩関係者から、土津霊神増祀の希望が出、協議の結果了承された。[25] この年は奇しくも正之公生誕三百年にあたり、猪苗代の土津神社の荒廃を嘆いた元

会津藩士のうちの有志が、神社の復旧を計る為に起ち上って「見禰山義会」を創立した年であり、さらに会津藩の家老であった山川浩（大蔵）の遺稿「京都守護職始末」が公表され、国内でも大きな反響を呼んだ時期でもあった。そうしたことを背景に増祠問題が起こった、というのが会津藩出身屯田兵の四世にして、平成六年当時琴似屯田兵子孫の会長を勤めていた、新國辰男氏の認識である。[26]

ところが、平成二年（一九九〇）に会津出身のある人が琴似神社の宮司に土津霊神のことを確かめたところ、神社には合祀された記録が無いことが判明した。新國らは思いがけない現実に驚くとともに放置しておく訳にはいかず、平成三年（一九九一）九月に改めて増祀を願い出、琴似神社御鎮座百二十年を期して実現を計ることになった。そうして平成六年（一九九四）五月十二日に猪苗代の土津神社で分祀祭が行なわれ、五月十五日には総勢一八〇人が参列して合祀祭が執行された。その時の感想を新國は、

この度のまれに見る厳粛な行事は、本道草創期の歴史的観点からも正に「世紀の祭典」の名に応しいものであった。会津藩出身の初代屯田兵達は、滅藩以来墳墓の地を離れ、苦難に充ちた斗南（移封された旧藩）時代から渡道入植後に於ても、常日頃から土津公を精神的支柱として深く崇敬しており、会津の方向に向って遥拝していたと聞いております。百二十年振りで私

写(2)　琴似神社（札幌市西区）

達の先祖の宿願が達成されたことによって、その当時、屯田兵の一団が新天地の開拓にとどまらず、先人たちの生涯の運命を切り開く端緒ともなった。北海道への移住を決断したこととも考え併せ、この度の琴似神社の合祀祭は、屯田兵関係者にとって極めて意義深いものと言えます。（傍線筆者）

と述べている。[27] 開拓地に入植者ゆかりの祭神を勧請して神社を創建する例は、枚挙に暇がないほどである。「常日頃から土津公を精神的支柱として深く崇敬しており、会津の方角に向って遥拝していた」人々ならば、亘理系の人々の動きを待つまでもなく、土津霊神を逸早く祀りたかったに違いない。諸般の事情でそれがかなわず、明治末年に子孫の力でその願いが叶ったと思いきや、理由が不明のまま放置された格好になっていた。一二〇年経ってそれがようやく実現した時の新國の気持ちは一入だったろう。先祖達の思いがようやく叶えられたという安堵感と、自分達は労苦の果てにこの地を開拓した先人達に連なっているという自負心を、この新國の発言から読み取ることができる。

ちなみに、明治末期の決定が放置されていたことと関連して言えば、東京の神田明神の主祭神として祀られていた平将門は、朝敵とみなされ明治政府（教部省）の意向により、明治七年（一八七四）には末社の祭神に格下げされることを余儀なくされた。そうして将門明神が主祭神として元通りに本殿に祀られるに至るのは、一一〇年余り経過した昭和五九年（一九八五）のことである。当時氏子総代であった遠藤辰蔵氏によれば、「戦前までは何となく将門は朝敵という意識があった。戦後の新しい世の中になって、そろそろほとぼりもさめた、そう思って本殿への遷座に踏み切った」という。[28] こうして見ると、明治末期における琴似神社への土津霊神の増祠も、世間からすれば時期尚早と判断され、据え置かれていたのかもしれない。

ところで、琴似屯田兵子孫の会は、入植一〇〇年を記念して昭和五十年（一九七五）に結成されたもので、会員数一五〇人余りである。会報の発行は昭和六十二年（一九八七）からであり、それを見ると総会・懇親会開催のほか、屯田兵関係資料を中心とする「郷土資料館」の運営に携わるとともに、宮城県亘理や会津若松への表敬訪問、他の屯田兵ゆかりの地との交流等々活動を行っていることがわかる。また会報には、「亘理、会津若松市、猪苗代町、父祖源流の地を訪ねて懐かしさが募る心の触れ合い」、「会津若松市長一行爽やかな真夏の琴似へ」「土津霊神の神木、会津藩縁りの各地へ」等々の記事が見られ、郷土の歴史を学習しつつ相互の交流を深め、また祖先の地へと思いを馳せているようにうかがわれる。筆者は以前同郷者集団について調査・研究を手がけたことがあり、普通ならば離郷者の二代、三代となるに連れて、会の活動にも故郷にも興味を示さなくなる傾向にあった。[29] ところが琴似屯田兵子孫の場合、三世、四世の時代になっても自身の

ルーツ、祖先の地へのこだわりは強まりこそすれ衰えることはなさそうである。現居住地に刻まれた歴史と会津が蒙った歴史とが不可分の関係にあり、特異な双方の歴史を記憶しているということが、大きな要因の一つなのかもしれない。

琴似に屯田兵子孫の会があるのと同様、下北には斗南会津会なるものが存在する。その前身は「下北郡在住会津藩人会」（会津相携会とも言い、のち下北会津会と改称し、昭和四十年に斗南会津会となる）であり、その成立年代は不明だが、廃藩置県から数年後のことと言われている。毎年五月に斗南藩庁仮館にあてられていた田名部の円通寺で戊辰戦争戦没者の招魂祭を行い、明治三十三年八月には三十三回大法要を催し、境内に招魂碑を建立した。今ではこの石碑が、斗南会津会のシンボル的存在となっている（写真(3)）。

明治四十五年（一九一二）四月に全国規模の会津会が設立され、青森県内にも支部が置かれるに至り、その傘下に入って横の繋がりを強化されたという[30]。円通寺での招魂祭はその後も「お花祭り」と称して春先に行われてきたが、昭和四十六年（一九七一）には斗南藩主・容大の姪に当たる秩父宮勢津子妃を招き、盛大に「旧会津藩斗南百年祭」が挙行された。なお、「斗南会津会々報」は昭和五十七年（一九八二）十二月に創刊されたが、冒頭の挨拶で菊池漁治会長は「悲憤と痛恨の宿命に耐え、苦渋の中で祖先が築いた教訓は、私達をたくましく育てているはずでございます。過ぎた百年の想いは、ともすれば忘れがちになりますが、確かな歴史と気概は、祖先から次代を担う子孫へ正しく継承する責務が私達にあるかと思います」と述べている[31]。「悲憤と痛恨の宿命に耐え」という表現が印象的であるが、菊池が語るところに斗南藩末裔者の心情が端的に表わされている。

現会長は木村重忠氏であり、曾祖父の重孝氏が藩の「書記官」であったことから多くの資料が伝わっており、現在大間の自宅の一部に「会津斗南藩資料館」を開設し、運営にあたっている[32]。なお木村重忠氏は、毎年九月の会津まつりに出向き、藩公行列に参加するとともに、土津神社にも参詣しているという。

写(3)　円通寺境内の招魂碑

三、神社の再興と地域社会

(1) 見禰山義会による神社再興と昇格運動

ここでは、琴似神社への土津霊神増祀に少なからず影響を与えたとされる見禰山義会の結成とその活動について概観した後、戦後に再編された土津神社の氏子組織について分析を加えることにしたい。

明治四十二年（一九〇九）の早春、福島在住の旧藩士二名が土津神社を訪れ、その荒廃ぶりに唖然とし、行動を起こすことになる。同年五月以降、神社設備の充実と神社昇格運動を目的として、全会津の有力者ならびに神社関係者九七四人を発起人に委嘱し、見禰山義会の創設運動を展開した。そうして同年十月七日、麻那郡役所で第一回の理事会を開くに至った。ちなみに、見禰山義会々員は全会津に及んでいるものの、こと会の運営に関しては、旧士族主導で進められた。見禰山義会創立旨意書には次のように記されている。[33]

（前略）抑モ土津神社ハ延宝九年ノ創立ニシテ　中御門天皇ノ御宇正徳四年土津大明神ノ尊号ヲ宗源宣旨アリ　其後明治七年縣社ニ列セラル　当時戊辰戦乱ノ後ヲ承ケ未タ同社維持ノ方法ヲ　設定スルニ至ラスシテ荏苒今日ニ及ヘリ　之レカ為メ其境域ノ荒廃社殿ノ破損等ハ充分之レヲ修理補飾スルコト能謹ミテ案スルニ叡聖文武ナル　今上天皇陛下登極以来古今ノ功臣ヲ封シテ別格官幣社ノ称号ヲ下シ給フ楠　新田　北畠　名和　菊池　結城　織田　豊臣　徳川ノ諸侯ヨリ慶長元和以降ニ於ケル諸侯　中島津　毛利　水戸　前田　上杉等ノ緒家祖先ノ如キモ亦既ニ此恩典ニ俗セリ　而シテ功績顕赫タル我カ旧会津藩祖正之公ニシテ尚ホ未タ此聖恩ニ俗セラレサルハ是レ偏ニ吾人等熱誠ノ足ラサルニ職由スルモノニシテ　実ニ慙懼ニ耐ヘサル所ナリ

寄附金によって社殿や付属施設の増改築を進めることのほか、主要な目的は神社昇格運動を展開することにあった。明治政府は、早くから国家に功労があった者に対しては贈位し、彼等を祀る神社には別格官幣社の称号を与えていた。この文面によると、毛利、水戸、前田等々の緒家の祖先がその恩典に浴しているのに比して、いまだ会津藩祖はそれも叶わず「慙懼ニ耐ヘサル所」と、先ず大正四年（一九一五）一月、第一回請願書を、社司・氏子総代・崇敬者総代の名で第二次大隈内閣の大浦内務大臣宛に提出した。[34] しかしながら、幕府に功労があったが直接国家に功労がなかったとして不許可になった。さらに第二回目の請願書を、大正十年（一九二一）、高橋是清内閣の床次内務大臣宛提出し、この時は衆議院議会で採択されたものの結果としては叶えられなかった。さらに昭和三年（一九二八）にも請願書を提出し、第四

回目の昭和四年（一九二九）のそれは、旧会津領内市町村長連盟の請願書であったが効を奏さず、昭和六年（一九三一）に満州事変に突入して、全会津一丸となった運動は中止の浮目に会った。[35] 戦後は社格制度も撤廃され、昇格運動に終止符が打たれた。その後、同義会の活動は有名無実なものとなり、昭和六十三年（一九八八）に解散するに至った。

それと前後するように、昭和六十一年二月には、土津神社神域整備奉賛会が結成され、各方面に寄附金を募った上で緒施設の整備等を行った。また、同六十三年十月に奉告祭を執行し、塩谷七重郎著『保科正之公と土津神社』が記念出版物として刊行された。それを引き継ぐ形で、平成三年（一九九一）十月、会員約一〇〇名に上る土津神社崇敬会が結成され、神社の祭祀および緒行事を、氏子会、保存会とともに協力して行うことになった。しかし、一〇年ほど前に中心的人物である塩谷七重郎氏が亡くなると、活動はほぼ停止状態に陥った。一方財団法人保存会は、昭和二十年（一九四五）八月、会津の有力者および在京の有志が設立したものである。その目的は、歴代藩主の遺徳を賛仰し、由緒ある文化・伝統を尊重するとともに、ゆかりのある建造物、施設等の維持管理に対して協力すること、さらには会津魂の昂揚に資することを目的に設立されたものである。同会も、御薬園、院内御廟等が松平家より会津若松市へと所有権が移るとともに、平成十四年（二〇〇二）には五〇年の歴史の幕を閉じた。[36]

明治初期の斗南藩から帰還した際の土津神社の造営、明治末期以降の神社の改築・改修と昇格運動を目指した見弥山義会の活動、これらはともに旧藩士主導のものであったが、全会津人が一丸となって推進した、という点で共通点が見られた。また、戦後から現代に至る、財団法人保存会や神社整理奉賛会等の活動も、各階、各層を巻き込んで土津神社の維持・発展を尽くしてきたが、現在その転機を迎えているように思われる。九月の市主催のイベント・会津まつりに関心が注がれるものの、土津神社への関心は相対的に希薄である。屯田兵子孫の会や斗南会津会ほどの熱気は見受けられない。むしろ彼らの方が「悲憤と痛恨の宿命」の共有者といった認識が強いのかもしれない。現状は氏子組織だけが地味ながら神社を支え、それによって維持されているかのようである。最後に、その氏子組織の成立と現状について報告し、結びとしたい。

(2)　神役・神料田の村々の現在

土津神社は会津地方全域の人々に親しまれていたとはいえ、その性格上藩主・藩士は別格として、神社と特別な関係にあった地域の人々がかかわるだけで、明確な形での氏子組織は存在しなかった。戦後になって各地域にようやく氏子会が組織されたのであるが、現在の氏子地域は土町（およそ五〇戸）、土田町（同六〇戸）、富永（同一〇戸）、打越（同四〇戸）、五十軒（同五〇

戸）、見禰山（同二〇戸）である。先ず、各地域の歴史を概観することにしたい。

土町は、延宝年中（一六七三～八一）当町の北に土津神社が営まれたことにより、同社社人の居住地として形成された集落で、猪苗代川東組に属した。『新編会津風土記』には、

（前略）家数二十四軒、コノ町ハ見禰山ノ社ヲ造営セシ後開ク所ニテ土津神社の境内ナリ、神楽歌鼓吹等ノ節ヲ戻シ、或ハ賀興丁等ノ神役ニ供スルタメニ年貢賦役ヲユルス、田圃モ処処ニ散在ス、中渠アリ

と記されている。[37] また「中程ヨリ社人町ニ至ル」とあって、その社人町については、

コノ町モ土津神社の境内ニテ、社司以下神官等ノ屋敷地ナリ、土町ヨリ北ニ折レ咸時間ノ方ニ行ク、南北二町四十間家数十軒、幅五間

とある。[38] これら社人町・土町同様、当初から土津神社とかかわっていたのが土田であり、既に触れたように、延宝年間の土田堰の開削とともに、土津神社の神料田として開拓された集落にほかならない。土町、土田町この双方の建設に尽力したのが家老・友松勘十郎氏興であり、土田集落ではその遺徳を偲び、忠彦（まめひこ）神社を創建し、祭祀を行っている。祭日は八月一八日に近い土曜か日曜で、この時に限り、土津神社の宮司にお出ましいただき、祭儀を執行している。その後集会所で直会となる。なお土田の氏神としては、大山祇神社が別途存在する。御神体は正面に「忠彦霊社」と刻まれた石碑であり、その他三面の碑文は以下の通りである。[39]

写(4)　土田の忠彦霊神碑

忠彦は友松勘十郎藤原氏興の霊号なり。
氏興、性廉潔にして才有り、弱冠にして経書に通じ、武事を好む。
十三才にして始て贄（にえ）を執（と）り（御目見えすること）、土津大明神に京都にて謁す。

明神、之を器とし、寵遇日に渥し、屢右職を転じて、擢んでて国老と為す。

賢を進め、能を達し、愛すれば即ち嬰児も之を慕い、怒れば即ち寓夫も之を恐る。

四方に使いして君命を辱かしめざるは斯の人か。

明神江府に於て即世するや、氏興遺命を奉じ、磐梯山の南麓見祢山の幽奥の処に葬り、墳を築き、廟社を立て、英霊を宗し祀典を制す。

又新に廟邑を磨上原に開く。

氏興乃ち役夫三十万人を促し、北に桧原川の流れを尋ね、山を脩め、巖を穿ち、西数十里を通し、之を此地に注ぎ、新に田畝を墾き以って神領と為し、冠するに土の字を以てし、命じて土田と曰う。

其の託さるる所に背かずと謂うべし。

然るに猶慮る所有り、此の如く墾田を附すと雖も、後世に到り、古記の採る可き無く。史録の証す可き無ければ、即ち後人何を以て之を徴し、子孫永世侵犯無きの地と為さんか。

暴君汚吏更に出て、或は社域境界を乱し、田里邑圃を奪うや必せり矣。

村民今に至り、咸恩顧を蒙る、（故に碑を建て祭祀して）〔原文もれ〕其の徳沢を謝せんと欲し未だ果さず。

癸丑（寛政五年・一七九三）冬余礼官一柳直陽に告げ、甲寅（寛政六年・一七九四）夏里民を諭し其の碑を建て、其の祭祀を忽にせざるを謀る。

元、是れ衆の願う所、一時許允を得大いに喜ぶ。里民戮力一心、石を鐫し碑を建つ。

氏興の功徳は史に記し句碑に伝う。是を以て贅せず。

里長穴沢宜智、余に請い文を作り不朽に垂らさんと欲す。

余、職として廟祀を司る。不敏なりと雖も、義として何ぞ辞せん。

是に於て其の表陰に書す。

一にその請う処に従うのみ。

寛政六年五月　日

見祢山社司　　平　義都　謹撰

（中野理八郎）

延宝期の開削・開拓からおよそ一二〇年経過した寛政六年（一七九四）に、「氏興の功徳を史に記し口碑に伝う」べく、この銘を刻み、忠彦霊神を土津神社の末社にあるものとは別に、自村に祀ったのである。

ちなみに、忠彦霊神脇には平成元年八月建立にかかる「開村三百二十年記念碑があり、「土田の村作りは、延宝四年より三十二人が猪苗代の各部落より入植、各々は間口二間奥行五間住宅馬屋

田五反畑二反米五俵と金壱両が渡された。又、苗代を作るため布藤、西久保、行津の各村が指定された。その後山を切り開き、田畑を増反し生活の基盤を作るべく幾多の辛酸、努力を重ねつつ云々」と刻まれている。これによって入植時の様相が理解されるとともに、今日に至る努力の跡がうかがえる。こうして新たに石碑を建立し、ムラに刻まれた歴史を再認識するとともに、忠彦霊社、土津神社とのかかわりを再確認しているものと思われる。

土田町同様神料田の村として開拓されたのが、その南に位置する南土田村（現猪苗代町千代田）である。集落は北部の打越と南部の富永とに分かれる。前者の開発に当たっては、藩の重臣・丹羽能教や下堂観村肝煎星名兵衛、同治左衛門らの尽力があったとされるが、寛政年間の成立。後者は下って文政年間の成立。両集落ともに越後国南蒲原郡の農家の次三男を中心に移住を募り、成立した集落という[40]。

最後に五十軒村であるが、寛永十五年（一六三八）当時の会津藩主加藤明成が猪苗代城の防御のため、物頭田辺仁右衛門ほか五三名の足軽に当地を開墾し給田としたことが当村の始まりである。その後保科正之もこれを引き継いだ[41]。

見禰山地区は戦後開拓された地域である。

以上、現氏子地域に当たる各地の開発の歴史を見てきたが、土町、土田、南土田（打越・富永）は古くから土津神社と直接かかわりを持つ地域で、五十軒も藩との関係を通して土津神社とかかわりの深い地域であった。この中で終戦後逸早く氏子会を結成したのは、やはり土町である。土町には、現在でも社人や神役の子孫の人達が多く居住している。もともと土町には武士（見禰山士族）、神官、楽人、緒役奉仕者と序列があり、居住地もそれに対応しており、神社に近い場所に上位者が、遠い所に下位者が住んでいたともいわれている。今でも多少序列意識があって、上位クラスの子孫ほどプライドが強く、下位クラスの子孫の中にはそれに嫌気をさす人も少くないという。しかしながら、神社との繋がりは自分達が最も強い、という認識は共有しているようである。だからこそ逸早く氏子会を組織したのである。

続いて氏子会の組織化に動いたのは五十軒であり、猪苗代城ゆかりの士族という関係上、氏子になったという。それに対して旧神料田として開拓された村には、会津藩滅藩の時点でその役目から解放された。しかし、土田も打越・富永（南土田）も、かつて神料田を耕作していたというかかわりから、やはり氏子となった。これらの地域の人々の中には、「神社を支えてきたのは自分達であり、土町の人達を喰わせてきたのも自分達にほかならない」と言ってはばからない人もいるという。今であるからこそ自由に発言できるのであるが、双方とも土津神社との歴史的関係を強く意識している、という点では共通する。

最後に氏子となったのは、見禰山地区の人々である。農地解放後、神社の御林は開墾地の指定を受け、その後開拓民が入植して

今日の見禰山地区が成立した。開墾地が土津神社の御林であったという縁故で、氏子会を結成したのである。[42]

土津神社は、正之公の遺志により創建以来磐椅神社の末社という位置付けであったが、昭和二十一年（一九四六）に神社本庁が創立されたことを契機に宗教法人として登録し、独立した。それ以来氏子総代は現在五代目となるが、初代、二代と土町出身者が勤めたものの、三代目に至って五十軒の人となり、四代目は再び土町の人が勤めたが、五代目は土田の人が選ばれるというように、オープンな形で選出されている。しかし、土町次いで土田町がより神社とかかわりが深いという認識は、少なからず存在するようである。

ちなみに、現在の土津神社の年間の行事は次の通りである。

一月一日　元旦祭
五月三日　春季大祭
五月九日　御花祭
九月二一日　秋季大祭
一一月三日　新穀感謝祭
一二月一八日　御神忌祭

春季大祭は、正之公生誕祭として七日に行われていたが、休日との関係上三日に変更された。九月二一日の秋季大祭も二七日行われていたものの、会津まつりに合わせて二一日に変更された。しかし、ご祥忌祭（御神忌祭）については寒い時期であるにもかかわらず、さすがに変更されることはない。五月、九月の祭礼時には、松平家現当主が参列することが多く、会津若松その他在住の旧士族関係者も祭りの時には参列しているが、年々少なくなる傾向にあるという。いずれにしても、昭和初期には神楽も奉納されたそうだが、今ではそれもなく、厳（おごそ）かに祭儀が執行され、直会へと続くだけである。

結びにかえて

土津神社は、会津藩藩祖・保科正之（土津霊神）を祀る神社であり、藩主と家臣（藩士）を中心に信仰・祭祀がなされてきた。しかしながら、延宝三年（一六七五）の遷宮式には「僧俗男女老弱（ママ）」が多数訪れ、庶民の関心のほどがうかがわれた。また、正之が「磐椅神社ノ末社タラン」との遺言を残したことと関連して、会津の惣鎮守・磐椅神社に準ずる形で庶民（領民）に親しまれた。そのことは『貞享風俗帖』によって確認することができた。

一方、グローバル化が進行する中でおこった明治維新に伴なう会津仕置が戊辰戦争後の廃藩・斗南藩立藩であり、これらに伴う遷宮は、若松県大参事の「叛賊の祖」は「速ニ除去スベキ」との意向に対処するものとして急拠なされたもので、この点は遠藤や塩谷の見解に修正を迫るものであるが、遷宮によって斗南藩士が精神的にどれほど癒されたかは察して余りある。琴似の会津藩・

斗南藩出身の屯田兵達が、「常日頃から土津公を精神的支柱として深く崇敬しており、会津の方角に向いつつ遥拝していた」という事実からしても間違いない。

なお、遷宮後間もなく廃藩置県となり、帰還の浮目に会うが、旧士族達の活動に呼応した庶民（旧領民）の力によって、猪苗代の旧地に社殿が再建され、県社となった。その後旧神社関係者を中心とする氏子会（この氏子会の実態は不明）と、旧藩士や有力者から成る崇敬会によって細々と維持されていたが、明治末期には荒廃が著しかった。そうした状況から見禰山義会が設立され、神社の改修・管理と別格官幣社への昇格運動が進められた。この時も主導的役割を果たしたのは旧士族にほかならなかったが、旧会津藩領の人々も貴賤を問わず協力した。そうして戦後に至ってようやくいくつかの集落に氏子会が組織されるに至る。それも土町、土田町以下創建当初から神社とかかわる地域であった（見禰山地区は別）。現在でも藩主の末裔、旧藩士の末裔が参列することはあるが、神社の維持と祭祀の執行は、旧領民であるこれらの地域の人々の手にゆだねられている。

このように創建以来、会津藩と領民（庶民）が一体となって土津神社を信仰対象とし維持してきた。帰還遷宮や荒廃に伴う再建にも、呼びかける側と呼応する側という関係は、旧士族―旧領民（庶民）と固定されていたものの、一丸となって対応した。しかしながら、戦後の宗教制度改革に伴って土津神社は独立し氏子会も再組織化がなされたが、後者は、なぜかほぼ旧神役・神料田の村々に限られる形となった。既に会津藩の滅藩とともに緒役から解散されていた筈であるが、その一部を受け継ぐことを自ら選択した訳であり、言うならば新たな装いのもとに封建遺制を引き継いだ、ということになる。過去のしがらみは容易に断ち難いのだろうが、むしろ神社とのかかわりの中に改めて自己のアイデンティティを見出した、と考えるべきなのかもしれない。一方では、現氏子地域の人々のさまざまな言動から、近世以来の権威志向の根強さを読み取ることができる。土田にある権威跪拝型の「忠彦霊神」の存在も、そのことの証左となろう。

註

（1）この時の成果は、松崎憲三編『人神信仰の歴史民俗学的研究』岩田書院　二〇一四年　一～二九〇頁としてまとめられている。

（2）宮田登『生神信仰～人を神に祀る習俗～』塙書房　一九七〇年　一四～一五頁。

（3）宮田登『生神信仰～人を神に祀る習俗～』前掲書　一四頁。

（4）白石太一郎「近世大名家墓所と古墳」『考古学から見た倭国』青木書店　二〇〇九年　四五九～五二八頁。岩本覚「長州藩藩祖廟の形式」『日本史研究』四三八号　日本史研究会　一九九九年　一～二五頁。大名墓研究会『近世大名墓の成立』雄山閣　二〇一四年　一～一八〇頁。

（5）会津若松市教育委員会編刊『史蹟　会津松平墓所』Ⅰ～Ⅶ　二〇〇四～二〇〇七年。近藤真佐雄「大名家墓所における院内御廟」『歴

史春秋』六七号　会津史学会　二〇〇八年　四～二五頁。

(6) 塩谷七重郎『土津神社と斗南藩』土津神社　一九八三年　一～二〇三頁。同『保科正之と土津神社』土津神社神域整備奉賛会　一九八八年　一～二〇三頁。同「土津神社の変遷」『歴史春秋』五七号　会津史学会　二〇〇三年　三九～五七頁。

(7) 小桧山六郎『保科正之の生涯と土津神社』歴史春秋社　二〇〇一年　一～七一頁。

(8) 遠藤由起子『近代開拓村と神社』お茶の水書房　二〇〇八年　三九～七六頁、七七～一〇一頁。

(9) 国史大辞典編集委員会『国史大辞典』第一二巻　吉川弘文館　一九九一年　七一八頁。

(10) 会津藩『家政実紀』は、初代正之から七代容衆に至る会津藩歴代の正史。寛永八年から文化三年に至る一七六年の出来事が編年体で記述されている。「見禰山御鎮座日記」は『続神道大系　論説編　保科正之（五）』に収録されている。

(11) 『新編会津風土記』第二巻　歴史春秋出版　二〇〇〇年　三二二～三二三頁。

(12) 豊田武他編『家政実記』三巻　歴史春秋社　一九七七年　二〇七頁。

(13) 豊田武他編『家政実記』三巻　前掲書　三五～二一六頁。

(14) 豊田武他編『家政実記』三巻　前掲書　二三五頁、二六二頁。

(15) 庄司吉之助編『会津風土記・風俗帖』巻二、歴史春秋社　一九七九年　一五八～一六二頁。

(16) 塩谷七重郎『土津神社と斗南藩』前掲書　一二七～一二九頁。

(17) 斗南藩滅藩後の藩士の動向については、葛西富夫『斗南藩史』斗南会津会　一九七一年　二九三号　三一三頁に詳しい。

(18) 猪苗代町史編さん委員会『猪苗代町史　歴史編』同市刊　一九八二年　三二六～三三〇頁。五戸町誌刊行委員会編刊『五戸町誌』下巻　一九六九年　六五頁。

(19) 遠藤由起子『近代開拓村と神社』前掲書　六八頁。

(20) 青木往春「生涯記録」『五戸町誌』下巻　前掲書　六五頁。

(21) 遠藤由起子『近代開拓村と神社』前掲書　五八～六七頁及び塩谷七重郎註（16）

(22) 札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫33・屯田兵』札幌市　一九八五年　一一五～一一六頁。

(23) 遠藤由起子『近代開拓村と神社』前掲書　九四頁。

(24) 琴似屯田兵百年史編纂委員会編『琴似屯田兵百年史』同事業期成会　一九七四年　二三〇頁。

(25) 「琴似屯田兵子孫の会々報」七号　同会刊　一九九三年　二頁。

(26) 「琴似屯田兵子孫の会々報」八号　同会刊　一九九四年　四頁。

(27) 「琴似屯田兵子孫の会々報」八号　同会刊　五頁。

(28) 松崎憲三「将門塚・道灌塚をめぐって～御霊の供養・祭祀～」『現代供養論考』慶友社　二〇〇四年　四八〇頁。

(29) 松崎憲三編『同郷者集団の民俗学的研究』岩田書院　二〇〇二年　一～二九二頁。

(30) 葛西富夫『新訂　会津・斗南藩史』斉藤勝巳刊　一九九〇年　二七九～二八三頁。

(31) 星亮一『斗南に生きた会津藩の人々』歴史春秋社　一九八三年　一二六～一二九頁。

(32) 「新天地、斗南へ」『トランヴェール』二五巻一〇号　J。R。東日本　二〇一二年　一八頁。

(33) 財団法人見禰山義会編刊『　同　沿革史』一九三六年　五～六頁。

(34) 財団法人見禰山義会編刊『　同　沿革史』前掲書　一〇五～一一四頁。

(35) 財団法人見禰山義会編刊『　同　沿革史』前掲書　一五九～二〇六頁。
(36) 塩谷七重郎「土津神社の変遷」前掲論文　五三～五六頁。
(37) 『新編会津風土記』第二巻　歴史春秋社　二〇〇〇年　三二〇頁。
(38) 『新編会津風土記』第二巻　前掲書　三二〇頁。
(39) 塩谷七重郎『保科正之公と土津神社』前掲書　三一三～三一四頁。
(40) 『歴史地名大系七巻　福島県の地名』平凡社　一九九三年　七六八頁。
(41) 『歴史地名大系七巻　福島県の地名』前掲書　平凡社　七七一～七七二頁。
(42) 塩谷七重郎「土津神社の変遷」前掲論文　五三頁。